

シェイクスピア劇の浮遊するアウトサイダー： *Othello* と Venice 表象

吉 田 季実子

1. 序

William Shakespeare の *Othello* の悲劇の根底には他者への完全なる理解は不可能であるという真理があるということは多くの批評家によって指摘されている。一例として、Fiona McNeill は、近著、*Poor Women in Shakespeare* の中で、封建制社会崩壊後に徐々に導入されつつあった貨幣経済を考慮したうえで、出自の違いだけでなく経済格差によってヒエラルキーの下部、あるいは外部に追いやられた女性について考察を行っている。この場合のヒエラルキーは家庭という単位に依拠するものであり、したがって婚姻関係によって、すなわち男性によって女性のヒエラルキーが制定され、さらには疎外の機構が確立されたともいえるのではないだろうか。当稿では、*Othello* を例にとり、Shakespeare 作品におけるアウトサイダーの定義およびその位置づけと彼らが有する内在的なポテンシャルに着目し、作品世界を支配する構造についての記述を行う。

2. *Othello* における秩序とヒエラルキーの構造

Othello は対トルコの有事における Venice と Cyprus を舞台にした戯曲であり、ここで創作年代当時のコンテキストを踏まえたうえで、作品中に存在する秩序体系について整理を行う。第一に着目すべきは人種を巡る問題であり、ほとんどの登場人物はイタリア人であるが Moor の Othello、ならびにフィレンツェ出身の Cassio が Venice 社会にとっての他者である。しかし、実際に社会の中で異分子として疎外を受けるのは Othello 一人であるといつてよい。Kim. F. Hall は Cassio の持つ中心性を、“The new military theory . . . was among its many intellectual developments, and Florentines like Machiavelli became noted military theorists . . . It seems fitting, then, that the “proper” gentleman and new ensign Cassio is a Florentine.” (Hall 233) と記述している。フィレンツェはルネサンス文化の中心であり、Cassio も異邦人としてというよりは洗練された上流階級の人物としてプロットの中ではむしろ Venice 社会の上流階級と同様に存在する。一方、Othello は登場当初から名前ではなく、Moor という人種によって示唆されているが、しかし5幕での自害の直前の独白¹に見られるように Othello はキリスト教に改宗しており、ムスリムとは一線を画したことに対する自覚が Venice 社会における彼のアイデンティティーの拠り所として機能している。また、後述するがプロットの中で Othello のアイデンティティーの不安定さがさらに進行して変容を続けるとともに、最後の独白にいたるまで Othello は変容を続け、むしろ再び異邦人に立ち返ることになる²。したがって、人種という観点からは Othello が唯一疎外の対象であるアウトサイダーであるといつてよい。

次に身分、ならびに階級において、劇中の登場人物の明らかな階級には Desdemona に代表される家柄という意味での階級、Othello、Iago、Cassio を巡る職業における地位という階級、そして Desdemona、Emilia、Bianca の属する、当時の倫理観および社会規範によって定められた女性の階級が存在する。家柄、ならびに身分に関して名言されているのは Desdemona および Othello のみであり、Desdemona は Venice の支配階級の生まれであり唯一高貴な家柄であることが明言されているが、一方 Othello は、冒険譚のなかでは虜囚

の経験を語っており³、かつそれまでの半生においてみずからを旅人にたとえていることから人種だけでなく支配を巡る階級においても非常に流動的なポジションに属している⁴。

次に、職業を巡る階級では、主に男性の軍隊における地位の問題になる。Othello は外国人でありながらも将軍という地位をえているが、創作年代当時の Venice では外国人を将軍として雇用した事例が存在しており⁵、同時に軍隊における階級制度はルネサンス期の軍制改革による軍隊の構成の変動によって影響を受けていることも明らかである。Cassio、Iago の立場に関しても、少なくともイングランドでは必ずしも副官と旗手の間の上下関係ははっきりしておらず⁶、執拗に繰り返される役職を巡る嫉妬が Iago の思い込みによって構築されたものであることが明白であるとともに⁷、軍隊の変動、つまりヒエラルキーの動揺にともなって発生した問題であり、Iago はこの革新のなかで疎外される立場、すなわち旧弊な秩序に属していることを自認している。

最後に女性を巡る地位に関して、16 世紀において conduct book では女性の分類は maid,wife,widow にわかれている⁸、その構成要素になりえない周縁に貧しい女性、whore といった疎外される対象が位置しており、Desdemona や Emilia と Bianca との間には明らかに格差が存在することは 5 幕 1 場で Bianca に向けられる Emilia の次の侮辱からも明白である。

EMILIA

O, fie upon, thee, strumpet!

BIANCA

I am no strumpet,

But of life as honest as you that thus

Abuse me.

EMILIA As I? Foh! Fie upon thee!

(5.1.119-23)

女性の中では明らかに Bianca が疎外される立場であるが、逆説的に階級的に疎外されている女性、アウトサイダーとされる女性が経済の新しい動きを担っていた、いわば革新者として存在していたともいえる⁹。これらの女性には家に束縛されない自由度、すなわちモビリティがあったために、浮遊する存在でありながらも一方で社会にたいして強い影響力を持ちえたといつてよい。また、Fiona McNeil が述べているように、当時舞台上には実際の女性は登場せず少年俳優が女性の役を演じていたが、その女性の不在がかえって社会の中で疎外され、アウトサイダーの地位に押し込められる女性の状況を暗示する¹⁰、すなわち女性という他者の不在がかえって逆説的にその存在を浮き彫りにしていたといえる。したがって、女性の階級においてもアウトサイダーと目される階級に属する人物は決して存在しないのではなく、かえって隠された力を発揮することでプロットに、あるいは劇の中の社会に強い影響を及ぼしているといつてよい。

以上、作品の中で明示されている人物間のヒエラルキーを列挙し、さらに当時の時代背景を考慮しつつ、その中で機能している疎外の構造について整理した。各々の階級、社会構造において構造の外部にいと考えられる他者の存在こそが、実際は逆説的に社会の構造の枠組みを浮き彫りにする役割を果たしているといつてよい。したがって、他者、アウトサイダーは存在しないのではなく、むしろ社会の構造の枠組みを成立させる上で不可欠な絶対的存在であるともいえるのではないだろうか。

3. Venice

前述の社会構造はすべて Venice という水に浮かぶ特殊な都市において展開されている。以下、イギリスルネサンス演劇における Venice 表象を記述し、その特殊性に関する考察を行う。Othello の舞台として設

定されている Venice 自体がすでに特殊な周縁的な位置にあるということについて David C. McPherson は *Shakespeare, Jonson, and the Myth of Venice* の中で、豊かで、知識にあふれ、正義の行われる都市として Venice が称賛されてきたといわゆる Venice 神話について述べているが、しかしその反面、Venice には狡猾なイメージや、性的な放埒さの影も付きまとい、その上、Venice はイギリスと同じヨーロッパにありながらも、むしろ異郷そのものとして人々を魅了する都市であった。また、対イスラムの最前線であり、かつ交易によってさまざまな人種が入り乱れる、いわば異空間、すなわち他者との境界線上に位置する不安定な浮遊する都市であったと記述している。以下、McPherson の分類を元に Venice 神話を検証する。

Venice 神話にはポジティブな面、すなわち陽の部分とネガティブな面すなわち陰の部分が両立しており、それぞれが相互に干渉しあって、Venice の特殊性を構築している。第一に Venice the rich、つまり豊かな Venice があげられているが、その富は東方貿易によって獲得されたものであり、そこから得られた財は軍備に注がれていた。したがって、Venice の豊かさの影にはオリエント、つまり他者が存在し、そこから得た恩恵によって同一の他者、すなわちトルコ、イスラムに対しての防衛を行っていたといえる。また、商人階級が貴族階級として君臨していったのも Venice の特徴であり、したがって、そもそもの階級自身が非常に脆弱であるともいえる。次に、Venice the wise、すなわち理知的な Venice が上げられている。これは近代的国家としての Venice 政体のありかたをたたえるものである反面、この文脈の中で、Venice は処女にたとえられており、理知性の裏側に存在する、逆説的な臆病が非難の対象となっている。この Venice の理知は他者との交渉術に集約される。この処世術にたいする評価には戦術、および軍隊の編成の変遷による影響をみてとることができ、また、式典の中で元首がアドリア海との婚礼を宣言する文章¹¹にもあるように、この国家はトルコによる侵略を寝取られることにたとえ、恐怖の対象としている。この点からも、軍隊の変遷にともなって、Venice において男性性自体が動揺している可能性を示唆することができる。三点目に、venice the just すなわち Venice における法整備が美点として挙げられている。ここで着目すべきは法律の遵守であり、社会前提として機能してきた既存のヒエラルキーが法のもとの公平性にとってかわられる、ヒエラルキーの交代の場としての Venice が浮上する。以上の三点に代表される Venice の美点は、すべて社会の動揺を内包しており、また既存の秩序に対する他者の存在によって顕在化する。しかし、一方で、Venice のもつネガティブな側面として McPherson によって規定されているものもまた、これらの美点の陰画である。

豊かな Venice は他者、しかも敵対関係にある他者によって構築されたものにほかならず、賢い Venice は一方で臆病でかつ女性的イメージを想起させ、また他者に対する猜疑心、恐れがその理知に内在しているといえる。したがって、Venice の賢さの影には男性性の欠如への恐怖があるのではなくだろうか。そもそも Venice の持つ魅力はオリエント的、異郷のイメージ、すなわちヨーロッパにとって内なる他者であるという点に起因する。Venice の風俗として McPherson は、有名な娼婦の存在について言及している。先に同時代の conduct book での女性の分類について述べた際に、娼婦をアウトサイダーとして規定したが、Venice において娼婦の存在はもはや無視することのできない内在する他者であった。Vaughan は Venice の娼婦について以下のようにのべている。“If Venice was called a virgin city by many, she was judged a whore by others. To keep their daughters intact and their lineage pure, the city fathers not only condoned but promoted prostitutions (Vaughan 16).” 娼婦は秩序を保つ上で公認の存在、つまり必要悪であり、自由な Venice の構成要素の一つであり、同時代の記録に娼婦が公けに登場していることからそのことは明らかである。これは Othello において行われる Desdemona 表象に対応するように、Venice の処女性の中に娼婦性が内在している二重の状態を暗示している。この Venice の娼婦性は、東方貿易によって富み栄えた Venice に向けられるヨーロッパのミソジニックな視線によって浮かび上がるものであり、Othello と Desdemona の関係性に合致している。

これらから、Venice 表象を通して得られるのは、Venice がヨーロッパ、イングランドにとって他者であったという事実にほかならない。トルコ、イスラムという敵対する他者の影響を受けて反映し、かつ対立の最前線に位置する Venice は、ヨーロッパにとって味方でありながらもその影に敵対する他者の存在を隠している、いうなれば内在する他者、アウトサイダーであった。その他者性が魅力的で好ましいものであり、かつ恐れの対象となりうるのはそれがはらむ二重性と、不在であるはずの更なる他者（トルコ）の幻覚を想起させるからに他ならない。McPherson は、“Venice was the preferred Italian city partly by default — the alternatives being less palatable from a religious and/or political point of view. After all, Rome was the seat of the Pope, Naples was long associated with Spanish power, and Florence was the home of Machiavelli. The patriotic Englishman really had little choice (McPherson 50).”と述べていることにみられるように、他者としては必ずしも好ましい他者ではなく、その異郷であるところに魅力を湛えながらも、実際にはイタリアの中ではイギリス人にとって消去法に好ましかったという点から、Venice という都市自体が浮遊する内なる他者であるといつてよい。

4. Venice と *Othello* ならびに階層社会を支えるベクトル

Othello の登場人物が Venice において表象するもの、つまり Venice という都市とキャラクターの相関関係について、象徴的なのは Iago の台詞の中で Venice 女として記述される Desdemona であるが、そのほかの登場人物も多かれ少なかれ Venice のなんらかの特徴を身に帯びているといえる。Desdemona はまさに、擬人化、ジェンダー化された Venice そのものであるといつてよい¹²。Desdemona は *Othello* によって、人格の二面性、美しい外見と心の不一致、姦通をうたがわれるが、これは Venice のもつ明暗の二重性、ならびに背後にあるイスラムとの関係とかさねあわされることができるのではないだろうか。この場合、姦通相手とされる Cassio がイスラムに、本来の主人である *Othello* がヨーロッパにあてはまるという人種的なねじれが生じるが、これは *Othello* の主観の中で Desdemona 像が Venice のイメージと一体化しているため、Desdemona に対する *Othello* のまなざしは Venice に対するヨーロッパのまなざしと一体化し、Cassio は侵略者たる異邦人に重ねあわされる。また、Desdemona は父に背いたことにより、Venice 社会の根底にある家族の法に抵触する^{13, 14}ため、社会規範の境界上に浮遊する人物であるもいえる。同様に本来なら Desdemona からかけ離れた存在である Bianca も Venice の暗黒部の象徴である娼婦そのものとして逆説的にもっとも Venice 的な人物である。Desdemona と Bianca の類似点としてともに男性の後を追って Cyprus に登場するという点があり¹⁵、かつ同時に舞台上に登場せず、Cassio が Bianca を話題にしている場面が *Othello* に Desdemona の話題であると誤解されるように、Desdemona と Bianca は Venice 女性の二面性そのものであり、ひいては Venice の二重性を体現しているという解釈も可能である。また、*Othello*、Iago、Cassio を巡る関係性はそのまま当時の軍事情勢を反映している。Venice で外国人を将軍として雇用することがあり、そのことが、東方貿易だけでなく、実際にトルコとの戦闘において異教徒の力を借用するという Venice の孕む矛盾につながる。それだけでなく、舞台が、十字軍以来の騎士道から近代的な軍事のプロフェッショナルリズムへと移行する過渡期でもあったことは、しばしば登場する *Othello* の大時代的な名誉へのこだわり、マキャベリの戦術家であるフィレンツェ人 Cassio の偏重、古い時代の軍人でありながらも、新しい形での戦略を、ロダリーゴの経済的援助と引き換えに繰り出す Iago の革新性という混乱に現れている。また、戦略をめぐる交渉で有利にことを運ぼうという Iago の姿は前述の Venice 知性の暗部にも一致しており、*Othello* の前近代的な名誉の観念とは対極にある。したがって、男性同士の軍隊内での状況も Venice における軍事の変革、さらには Venice らしさの反映といえる。以上、この作品中に存在するヒエラルキーを記述すると、人種、役職、ジェンダー等のヒエラルキーが存在しており、それぞれが一見独立した関係にあるで、その相互の関係を考察すると、次のような関係性が浮上する。すなわちあるヒエラ

ルキーの中で疎外されているものは他のヒエラルキーを強化する力をもつ、あるいは強化する方向のベクトルを持つ。その中でもさらに、既存の秩序において保守化することでその秩序を強化するベクトルと、革新的な秩序を打ち立ててそのなかでヘゲモニーを掌握するというベクトルとに二分される。以下、*Othello* におけるそれらのベクトルについての考察を行う。

Othello は *Venice* の軍隊において将軍という地位にあり、軍隊という社会の階級制度の中で位置を占めている一方で、民族的には異人種であり、その外貌から常に他者としての存在であることを周囲に意識させざるをえない。*Desdemona* は身分の高い令嬢でありながらも、父にそむいて異人種の *Othello* の妻となったことで、もはやかつて属していた *Venice* の上流社会、あるいは自分が所属していた一族からは疎外される。*Iago* は、*Venice* 人の軍人でありながらもその階級は低く、軍隊のヒエラルキーでは下位に位置しており、その妻 *Emilia* は夫に誹謗され、また *Desdemona* に仕える立場であるために、戯曲中での身分は高いとはいえない。*Cassio* はイタリア人であっても *Venice* 生まれではなく、*Bianca* は娼婦、つまり社会の構成員としてみなされる女性の埒外にあるとあってよい。しかし同時にこれらの人物は劇における *Venice* 社会を構築する重要なパーツとしても機能している。*Venice* は交易によって栄えた都市であり、したがって異人種との交流を遮断することは不可能であり、また実際に外国人の将軍を雇用していた。*Desdemona* は自らの結婚を正当化する際に、父に対して「母がそうしたように」父よりも夫を選ぶと述べており¹⁶、したがって夫婦関係という新たな関係性の構築に成功しているといえる。*Iago* は軍隊において出世できないジレンマを抱えながらも、実際当時の軍隊における旗手は戦術上では重要な実をともなったポジションであり、*Emilia* は、*Iago* の解釈上では妻という女性の中でも理想的なマジョリティの位置にあり、*Cassio* は戦場では軍人としての能力は低くとも上流階級に属している。そして *Venice* の娼婦という存在が歴史的にも無視できない存在であったことと、*Venice* という都市自身がしばしば娼婦にたとえられていたことから、*Bianca* はまさに *Venice* という都市国家の一部であるといえる。このように一見、秩序から逸脱して社会構造の周縁に位置している *Othello* の主要な登場人物はただプロットにおいて重要な位置を占めているだけでなく、各々のヒエラルキーの周縁と内部を行き来することによって、社会の構造を支持し、強化、あるいは変革しているともいえるのではないだろうか。

人種において最下位に位置する *Othello* は、その異民族性ゆえに傭兵として将軍になり、軍隊内で高い地位をえる。さらに、大時代的な騎士道精神に固執し、軍隊における保守化の度を深めることで国防のイデオロギーを強化し、他者トルコを排斥すべく戦う。同様に、最後の独白にあるように、クリスチャンであるアイデンティティーを強く提示して異教徒の排除を主張する。また、異人種性を強く自覚し、ヨーロッパ人に妻を寝取られたという妄想をもつにつれ、夫婦間における男性優位のイデオロギーを強化しようと保守化する。*Cassio* は、*Cyprus* での事件によって軍隊の中で立場がさがると同時に、少なくとも *Othello* の妄想世界の中では女性を巡る関係性のなかで上位に昇格する。軍隊での泥酔は軍務の妨げと考えられていたので、飲酒によって軍人として、あるいは男性としての *Cassio* のポジションは *honour* の面において損なわれるが、かえって女性との関係の中で女性に近づきやすい、軍人とは異質な新たなカテゴリーの男性存在へと変貌することになり、また他の夫たちに嫉妬させることで夫たちの自意識の中で *honour* を奪取する。*Iago* は軍隊では疎外妄想を抱くが、その分、策謀を磨き、異人種 *Othello* を排斥しようと、保守的な差別論者に変貌する。同様に *Desdemona*、*Emilia* などの女性を娼婦とののしる保守的なミソジニストであり、また、軍隊における上下関係を *Othello* との関係性の中で破壊し、*Roderigo* との間に金銭を媒介にする新しい契約の秩序を創造する革新者であるともいえる。*Desdemona* は父を裏切り、夫に従うと宣言した時に、親子間のヒエラルキーを破壊し、かつ保守的な夫婦関係を構築するが、その結果、*Venice* で自らが属していた上流社会からは周縁に追放される。また、*Cassio* の懇願により、夫の職分に干渉した際に、結果として夫への影響力を失う。当時、女性との関係性に耽溺することによって男らしさが損なわれると考えられており、これは戦場に女性を伴ってはいけないという常識にも繋がるが、*Desdemona* はこの規範をも打

破することで Othello の男性性を侵犯し、Othello はその危機感とともに Desdemona を恐るべき対象＝他者と認識する。Emilia はジェンダーの階級では男性よりも下位に位置していることを理解しており、Desdemona との主従関係を強め、最後には夫よりも女主人に使える点で、夫婦間の秩序を破壊し、夫が破壊した主従関係というヒエラルキーにおいて保守化する。女性の中で下位の娼婦の Bianca は、Cassio との関係性の中では、男性に対しては強い力を発揮する。この円環関係というよりもむしろそれぞれのキャラクターのもつ二面的な力によって構築される関係を象徴するのは willow song の場面の Emilia の台詞¹⁷である。夫を世界の帝王にできるならば、不義をはたらいてもよい、そのかわり、新たに秩序を構築してその中では自らの罪はなかったことにできるという主張は、夫への愛情の深さよりは、むしろ Emilia の Iago 的な性質、つまり周囲の事象をコントロールし自らの都合のよいように変化させようという意思の表出である。善として認定されない行為をあえて、二つのことなる秩序の中で解釈し、その物事の全くことなる二面性を提示させようというこの行為、さらにはその結果生まれる一つの事象に関する曖昧な二面的な解釈はまさに Venice 的である。最初に Desdemona に疑いを向けさせるのが Iago の語りであるのと対照的に、そのたくらみを打破するのは Emilia による告発であるという点からも、Iago と Emilia は価値観、あるいは秩序を反転させる能力を相互に有する鏡像的存在であるといっただけではないだろうか。この両者に特徴的な点は、Iago は軍隊の中で疎外されていると自覚しており、一方 Emilia は、自らが男性の権威の前に抑圧されていることを自覚しているという点であり、アウトサイダーであることへの認識が強いものほど、かえって秩序間の力学をコントロールし、保守化、あるいは革新者として混乱を生み出しながらもヘゲモニーを掌握しうる能力を得ることになるといっただけよい。その中で、自覚的アウトサイダーは自分以外のものをアウトサイダーとしてあぶり出し、新しい疎外の機構を構築することに成功するのである。

5. Venice におけるアウトサイダーの力学

さらに、これらのアウトサイダーの果たす役割についてこの戯曲の舞台 Venice という都市のもつ特性の中で、特に異郷、娼婦という観点に着目する。先に述べたように、交易都市 Venice において、外国人の將軍は必ずしも忌避すべきものでは決してなく、したがって Othello は Venice 社会から完全に遮断されておらず、彼は Christianized された Moor であり、イスラム教徒からは一線を画していることを自覚している。しかしその反面、Desdemona の心を捉えたのは異国での冒険譚すなわち彼の中に内在する他者性であり、これはまさに Othello がさすらい浮遊する存在であることを実証しており、同様にその不安定性、他者性こそが人を魅了する、Venice 的人物であるともいうことができるのではないだろうか。この Venice 的な Othello に対し、Venice を知らない、すなわち Venice 社会にとっての他者であるという意識を植え付けるのが Iago である。Iago は生来の Venice 人であり、また同時に生来の軍人であるにもかかわらず軍隊内での地位では疎外されており、有る意味では属している社会の周縁部にいるがその一方で、ほかの潜在している他者に対しては非常に鋭敏であり、自分の属する秩序以外でのアウトサイダーをあぶりだし、再生産している。Iago によって Venice 女性らしいと形容された Desdemona は、父に母が従ったのと同様に自分は Othello を愛するべきであり、また自分は父を敬う義務と夫に従う義務の二つに引き裂かれていると主張するが、後に Iago は父親に背いた女なのだから夫にも背くはずであると、Desdemona の “divided duty” を再解釈する。Desdemona は自ら父を家長とする秩序を破壊するが、その中で夫への服従を保守的に自ら義務化し、さらに、のちに夫の職分へ介入し戦場での秩序を破壊したことで、夫との関係性からも追放される、所属の不安定な浮遊する存在にほかならない。この秩序と浮遊の問題に関して、対象を女性に限定した上で、McNeill は、(maid、wife、widow という女性の) 階級秩序の周縁に位置する女性は自給自足で生活し、自由度が高く、また自己成型が可能であったと述べている¹⁸。すなわち Stephen Greenblatt が Iago に関して提示している、improvisation の能力¹⁹をこれらの女性が持っていたと McNeill は主張するが、この

improvisation は疎外される対象にそなわっているという可能性を考慮することができるのではないだろうか。Othello において、人種面で疎外される Othello は軍隊、夫婦の秩序を、軍隊、職業面で疎外される Iago はジェンダー、人種の秩序を、さらに父子関係に意義を唱え、人種の壁を崩そうとする Desdemona は夫への服従を、とそれぞれ旧弊な価値観を保守的に遵守し、あるいは既存の秩序とはまったく別のあたらしい秩序を創造しようとしている。なかでもその傾向は先に述べたように、他者であることへの自覚が強い Iago と Emilia に顕著であり、つまり、一つの価値体系の中でその帰属意義、所属を失った人物が、他の機構において保守化し、あるいは既存の機構を破壊し、まったく新しい機構を再生産し、強化することによって他の者を同様に別の体系から締め出そうとし、結果的に混沌が訪れることになるのである。そこで起こるのは浮遊の連鎖反応に他ならず、これは舞台である Venice が有する浮遊しつづけるアイデンティティーともあいまって、この物語をアウトサイダーの物語にしているといつてよい。さらに Venice の二重性の中に含まれるトルコの影にみられるように、アウトサイダーが抱えているのは内在する他者であり、それを表面にあぶりだすことによって疎外の連鎖が続く。それは、Cyprus に Venice 軍が討伐に向かったはずのトルコ軍が、描かれていない幕間に嵐に沈み、消えてしまった後に、Venice 社会に潜むアウトサイダーが浮かび上がる、すなわち他者が外部から内部へと潜行するというプロットの流れとも一致している。1幕で Venice 社会が警戒すべき他者は異人種 Othello であった。しかし、トルコ艦隊接近の知らせとともに、もはや Venice 社会にとって直面している戦うべき他者は異教徒トルコのみになり、Othello は Venice へと迎え入れられ、先頭にとってアウトサイダーから Venice を防衛しようとする。しかし、舞台が Cyprus に移ると、異教徒は登場することなく水没し、消滅した後で、そこに登場するのは男性社会にとっての他者である妻、娼婦、そして秩序を操ろうとする Iago にほかならない。3幕以降、今度は社会内部に潜むアウトサイダーたちがあぶりだされることになる。したがって警戒すべき対象は Venice 人社会の内部に再生産されるわけであり、あたかも水没した他者が、水に浮かぶ Venice の都に潜行し、内在化したかのような印象さえ与えている。

Iago の Othello にあてた台詞のなかで Desdemona が Venice の女と称されるときに、そこに含まれるのは Venice の女が主人公にとっては理解不能な他者だという事実である。先に述べたように、Venice の存在がまずヨーロッパ社会におけるうちなる他者であり、同時にその帰属があいまいな浮遊する存在であるということ、そしてさらにその不安定性こそがプロットに投影され、プロットを支えており同時にさまざまなヒエラルキーがせめぎあうなかで、この作品における秩序はこの浮遊性の中で宙吊りにされているといえる。Venice は共和制の理想体系をもち、独自の法律を厳守した上で正義が行われており、法体系が秩序を保つ上での機構として機能していたとされる。また、共和制国家 Venice において、身分というよりも職分、地位のもつ権威は偉大であったのは顕著にあらわれており、Brabantio や Duke の地位についてしばしば言及が行われている。このことは、劇中の Venice において相対的な人間関係の構造が秩序を保っていることのあらわれであり、その一方で、メインプロットに関与する人物はいずれもその秩序の周縁に位置しているにもかかわらず、しかしヒエラルキーを成立させる上では不可欠な社会の構成要員でもある。その上、厳密には完全に周縁というよりはヒエラルキーの内部と周縁を往復しており、全員が浮遊する主体であるといえるのではないだろうか。したがって、戯曲を支える Iago の陰謀、ならびにそれによって動揺する秩序や生じる問題は、元をたどれば、この戯曲の中で描写されている限りで Venice に内在するものであり、それらが improvisation の能力を駆使しようとする Iago を発端に連動したに過ぎないのではないだろうか。そしてそれを終結に導くのもまた improvisation の能力をもつ Emilia に他ならない。

6. 結

人種をはじめとする差異と、夫婦間での愛情と嫉妬の劇として解釈される Othello は、一方で、Venice

社会に存在する様々な他者との相互理解の不可能から生み出されると同時に、社会の体系や規範から締め出され、浮遊しつづけるアウトサイダー同士の相克、あるいはアウトサイダーによる各々の規範への干渉、ならびに秩序体系同士の相互作用の劇として読み解くことが可能であるといえる。アウトサイダー発生の機構の原点にあるのは、他者という浮遊する主体への意識であり、また舞台である Venice 自身が、イスラムという絶対的な他者の不在を主張することによって、かえってその存在を内在化させるという二重性をはらんだ浮遊し続ける主体であることにほかならないためである。したがって、この劇における登場人物はそのまま、ヨーロッパと異教徒との最前線に位置する政治的地理的な浮遊する異郷である Venice、さらには地理学的にも水の都、すなわち水の上に浮遊する土地である Venice の孕む不安定性、異郷性、他者性の投影であり、その特徴こそが、この悲劇の原点であるといえることができるのではないだろうか。

注

本稿は日本英文学会第 80 回大会（2008 年 5 月 26 日於広島大学東広島キャンパス）における発表を元に再構成したものである。

¹ And say besides that in Aleppo once,
Where a malignant and turbaned Turk
Beat a Venetian and traduced the state,
I took by th' throat the circumcised dog,
And smote him, thus. (Othello 362-6)

² the most striking transformation or conversion is Othello's change from noble Christian (already converted) to "circumcised dog" (5.2.365), also spoken of as "turning Turk"; . . . Conversion speaks to anxieties over the mutability of identity — the ability of the self to become redial "other", indeed the other that is most feared — and suspicion of the convert is rife in Renaissance text. (Hall 6)

³ **OTHELLO**
Wherein I spoke of most disastrous chances:
Of moving accidents by flood and field,
Of hair-breadth scapes i' th' imminent deadly breach,
Of being taken by the insolent foe
And sold to slavery; of my redemption thence,
And portance in my travailous history,
(Othello. 3.134-9)

⁴ travelers and heroes can easily become wanderers, dangerous displaced figures unconstrained by cultural codes and laws. (Hall 230)

⁵ This ambivalence resulted in the Venetian practice of employing "strangers," *condottiere*, as a professional, standing army. The status of non-Venetian captains was necessarily ambiguous — vital to the state's safety, but seldom a fully accepted part of it. (Vaughan 5)

⁶ The Lieutenant was also the primary conduit of information between his superior and his soldiers. Garrard observed that the lieutenant's part "is to giue willingly and readily counsel and advise to his captaine, as often as he is demanded." The Lieutenant was especially charged "to carie with him a diligent care of concord, for that particularly the pacification of discords & difference amongst ye souldiers of his company," . . . The Lieutenant should also consult frequently with the Ensign. (Vaughan 42)

⁷ Iago's eyes are on the lieutenantcy, but the ensign's rank carries powerful symbolic weight. . . the lieutenant could represent the general by wielding his power, . . . the ensign literally represented the company by carrying its "colors" — its standard of flag — and its reputation. (Hall 296)

⁸ Early modern marriage manuals organized women into three categories: maid, wife, and widow, of which wife was considered the ideal. (McNeil 1)

⁹ In early modern drama, they circulate between plots, essential because they are so mobile, but largely unnoticed because of

their *mobility*. (McNeil 3)

¹⁰ the women on stage were, in fact, men. There is, she reminds us, no room for women in the realm of representation — at least as agents of representation — something that must make us think carefully about what “women” on stage do represent. Callaghan usefully distinguishes between the lack of “presence” of women on the stage and the ubiquitous “representation” of women on the stage: (McNeil 4)

¹¹ But that which you must find does best adorn her
Is when those cuckolds old go wed the sea.
Venetians husbands then, the Turk the horner (McPherson 31-2).

¹² In Venice they do let God see the pranks
They dare not show their husbands; their best
conscience . . .
She did deceive her father, marrying you;
And when she seemed to shake and fear your looks,
She loved them most.

(*Othello* 3.3.205-7,209-11)

¹³ She has violated cultural taboos by marrying without her father’s permission, and by wedding a Moor. . . . Desdemona and her lascivious Moor have threatened not just Brabantio but the social order. Marriage among the aristocracy of Venice was a carefully controlled political ritual. (Vaughan 28)

¹⁴ She has violated the city’s virgin image, disturbing Venetian order and degree and has shown herself to be un-Venetian. (Vaughan 32)

¹⁵ Bianca に関しては Venice 出身か Cyprus 在住かはしばしば議論の対象になっている。

¹⁶ **DESEMONA** My noble father,
I do perceive here a divided duty.
[. . .]
I am hitherto your daughter. But here’s my husband,
And so much duty as my mother showed
To you, preferring you before her father,

(*Othello* 1.3.183-4, 188-90)

¹⁷ **EMILIA** By my truth, I think I should, and undo’t when I
had done.

[. . .] But for all
the whole world? ‘Ud’s pity, who would not make her
husband a cuckold to make him a monarch? I should
Venture purgatory for’t.
[. . .] Why, the wrong is but a wrong i’t’h’world; and
having the world for your labour, ’tis a wrong in your
own world, and you might quickly make it right!

(*Othello* 4.3.66-7, 69-72, 75-7)

¹⁸ McNeil, Fiona. *Poor women in Shakespeare*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

¹⁹ Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning*. Chicago: U of Chicago P, 1980.

参考文献

Daileader, Celia R. *Racism, Misogyny, and the Othello Myth: Inter-racial Couples from Shakespeare to Spike Lee*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning*. Chicago: U of Chicago P, 1980.

Loomba, Ania. “Shakespeare and cultural difference.” *Alternative Shakespeares, vol.2*. Ed. Terence Hawkes. London: Routledge, 1996.

McNeil, Fiona. *Poor women in Shakespeare*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

- McPherson, David C. *Shakespeare, Jonson, and the Myth of Venice*. Newark: University of Delaware Press, 1990.
- Shakespeare, William. *Othello, the Moor of Venice: Texts and Contexts*. Ed. Kim F. Hall. Boston: Bedford/St. Martin's, 2007.
- . *Othello, the Moor of Venice. The Oxford Shakespeare*. Ed. Michael Neill. Oxford: Clarendon Press, 2006.
- Smith, Bruce R. "L[oc]ating the Sexual Subject." *Alternative Shakespeares, vol.2*. Ed. Terence Hawkes. London: Routledge, 1996.
- Vaughan, Virginia Mason. *Othello : a Contextual History*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.